

許紀霖 他 共著

『近代中国知識分子的公共交往（1895-1949）』

楊韜

I はじめに

本書は、上海人民出版社『都市空間与知識群体研究書系』の一冊として2008年4月に刊行された。本書は、同シリーズの最新篇、または完結篇である。

本書は8人の著者による共著書であるが、その中心的存在である許紀霖氏<sup>1)</sup>とその弟子たち<sup>2)</sup>によって「3年以上の時間をかけて、10数回の研究会を経て得られた集団的成果である」（本書p.542、以下同じ）と述べられているように、各章における個々人のテーマが巧みにつながれることによって、一冊の中国知識人の歴史研究書となっている。

本書の構成、各章の著者は次のとおりとなっている。

第1章 総論：近代中国的「知識人社会」、許紀霖（華東師範大学歴史系教授）

第2章 士人、都市与権力：清末沪上知識分子的交往網絡、瞿峻（華東師範大学歴史系講師）

第3章 岂有文章惊天下：五四時期京沪知識分子的公共生活、宋宏（華東師範大学社

---

1) 著者の1人である許紀霖氏は、華東師範大学歴史学部の教授であり、1980年代以来中国の知識人に関する研究を行っており、本書のほかに編著書『大時代中的知識人』（中華書局、2007）、『20世紀中国知識分子史論』（新星出版社、2005）、『中国知識分子十論』（復旦大学出版社、2003）、『無窮の困惑 黄炎培、張君勱与現代中国』（上海三聯書店、1998）、『第三種尊嚴』（北京人民文学出版社、1996）などがある。英語圏の研究者Cheekは、許紀霖氏を現代中国の「思想工作と公共知識分子研究の中心的人物」（Cheek, 2006, p.402）と呼び、許紀霖氏の研究経歴と研究成果を代表例として捉え、現代中国における知識人研究の状況を考察している。許紀霖氏自身も、2004年秋に発行された「南方人物週刊」の「中国公共知識分子トップ50」に選ばれたように、近年中国の代表的な知識人の一人として注目されている。

2) 本書は8人の著者による共著書であるが、「後記」によると、瞿峻氏などの7人は許紀霖氏の「研究生（大学院での教え子）」である。この7人が考察する時代や人物・団体は異なるが、「都市空間における知識人ネットワーク」を重要視している共通認識を持つことは分かる。しかし、筆者の勉強不足で本書のみでは8人の著者のはっきりした相違点は読み取れなかった、今後各著者の著書や論文を参考したうえで明らかにしたい。

科部副教授)

- 第4章 分岐与底線：1920年代知識分子的交往網絡，王曉漁（同濟大学人文学院講師）
- 第5章 疎離与融合：1930年代的知識分子与上海地方社会，王儒年（中国薬科大学副教授）
- 第6章 十字街頭の象牙塔：1930年代北平知識分子的交往世界，唐小兵（華東師範大学歴史系博士生）
- 第7章 地縁，学縁与慣習：抗戦時期西南聯大的知識分子共同体，儲徳天（華東師範大学出版社編輯）
- 第8章 重建社会重心：戦後知識分子的同仁群体，鄭志峰（華東師範大学歴史系博士生）

## II 本書の目的と結論

本書の目的と結論は、許紀霖氏による第1章「総論」のなかで述べられている。本書での議論は、中国の伝統的士大夫は近代において徐々に現代知識人へ転身した後、その社会的政治的影響力は上昇したのか（継続的に社会の核心となっているか）、それとも下降したのかという問題（社会の周縁におかれたか）から出発している。これについて、本書のなかで余英時と張灝の論点を引用されている。許紀霖氏によれば、余英時は20世紀の中国知識人は絶えず周縁化されてきたと主張している。それに対して、張灝は転換期の知識人を理解する際に、彼らの政治的周縁性と社会的遊離性を見る一方、文化領域における核心的地位にも留意すべきだと主張している。この両者の論点を踏まえ、許紀霖氏は、中国知識人の社会政治的地位の下降、そして文化領域における影響力の上昇という二つの現象は歴史において同時に発生したとする考えを打ち出した上で、本書の問いを提出している。即ち、この二つの現象はなぜ同時に発生したのか？両者の間に何か内在的関連性はあったのか？そして、なぜ「輿論権力」<sup>3)</sup>を手に入れた中国知識人は依然、最終的に周縁化されたのか？この三つの問いを解明することが本書の目的である。

本書では、清末から民国までの知識人による社会的影響力の変化を二段階に分けて捉えている。まず、19世紀末から1920年代末にかけては知識人の影響力が上昇した時期である。この時期の知識人たちは、大学、メディア及び各種の社会団体を通して、都市ブルジョ

---

3) 本書のなかで、「輿論権力」(p. 1) や「文化権力」(p. 21) や「知識権力」(p. 30) というような表現は使われている。第2章の始め(p. 31)、瞿峻は脚注で「ここでの(権力)という概念はフーコーの言うマイクロ権力を指している。彼(フーコー)は権力が知識・文化・名声などによって構成されたコントロール及び支配的構造である。」と解釈している。フーコーの「権力」に関する説についてここでは深入りしないが、おそらく本書では教育やコミュニケーションやメディアとの関連で権力を再構築することを強調するためにこのような表現を用いていると考える。また筆者は、瞿峻の解釈が第2章だけでなく、本書全体に対する説明にもなると理解している。

アジーとともに中央権力に対抗できる民間社会を構築した。しかし、1930年代初めから1940年代末までの時期において、彼らによる社会的影響力は下降した。

この変化をもたらした原因は、多様である。本書のなかでは、主に歴史上の政治権力の変化、地域社会・政治制度からの乖離という2点を取り上げている。まず、歴史上の政治権力の変化について見てみよう。前述した二段階の第一段階では、清朝の崩壊によって中央権力が衰退、地方勢力が台頭した。また上海などの租界がある都市では多様な政治権力が存在した。北洋政府、国民政府は軍閥との内戦を続けた結果、広大な中国では、長期間において強力な中心的権力の不在現象が生じた。これによって中央政府の民衆への支配は逆に弱体化し、社会各方面はむしろ経済・文化を中心とした自由な発展への道をたどることとなった（この点に関しては後に再び触れたい）。しかし、1930年代以降、蒋介石の南京国民政府の安定とともに、中央権力の社会各領域への浸透とコントロールが始まった。とくに、1940年代以降、「戦時集権」という名目で統制はさらに厳しくなった。このように、歴史上の政治勢力の消長及び変化によって、「かつて生き生きとしてきた知識人社会は、戦争・内戦に徹底的に打ち壊された」（p.22）という。

次に、地域社会・政治制度からの乖離について見てみよう。許紀霖氏によれば、伝統的な士大夫たちは地域社会・帝国政治の双方ともに内在的且つ制度的につながっており、しかも共通の儒教宇宙観・価値観・倫理観をもつイデオロギー的な共同体であった。しかし、科挙が廃止された後、知識人たちが文化権力を所有する知識人社会を構築したにもかかわらず、「内外断裂の局面」（p.23）は現れた。即ち、外部においては、独立した現代知識人は中国社会と徐々に分離し、文化と社会の地盤を失い、内部においては、共通な信仰・価値観・イデオロギーが失われたため、知識人たちは一つに統一した集団ではなくなった上、都市部エリートと農村部エリートの間における有機的つながりもなくなった。ここで許紀霖氏は、民間教育・メディア・出版業界を基礎とした上海の知識人社会を例外として挙げている。上海の知識人社会は、上海の地域社会と密接な関連があり、その地域社会の一部を成している。しかし同時に許紀霖氏は、上海という都市地域社会と伝統的な農村地域社会とは、大きく違っていると主張する。なぜならば、農村地域社会の主役は常に「士紳（士人+郷紳）」であったのに対し、上海地域社会におけるエリート層の主役はすでにブルジョアジーへと変わっていたからである。内戦勃発後、知識人が中心とした中間路線者（第三勢力）が仲裁と制約の力を失ったように「上海の知識人たちはブルジョアと有限的な同盟を結んでいたが、全体的にいえば成功を収めなかった」（p.28）という。

以上のように、近代中国知識人たちは、自身の「知識権力」<sup>4)</sup>と世論における影響力を通して、自由且つ独立した知識人社会を構築したが、その基盤は脆弱なものであった。彼らは、地域社会との有機的つながりを失う一方、政治的制度との関連も脆弱であった。大

---

4) 脚注3) に参照。

学にしても、メディアにしても、いずれも体制的保障が欠けていた。近代中国知識人は、「身分上依然として自由な遊士であり、心理的に不安定であり、いつもある階級・党派或いは社会政治力に依存しなければならなかった」(p. 30) というのは、本書の結論である。以下、各章の内容を簡単にまとめながら、全書の様子を伺ってきたい。

### Ⅲ 各章の内容

第1章は本書の総論であり、主に前述したような目的と結論が述べられている。

第2章は、清末知識人の転換期における最大の特徴——流動性の高まり・上昇について論じている。その流動性は、より多くの士人の農村から都市への移動を指している。例えば、市鎮から県城・府城・省城への移動、さらに沿岸部の大都市（北京、上海、広州、天津など）への移動、そしてそのなかの少数一部が外国へ移動した。もう一つの流動は、全国各地の商業都市の間における士人たちの往来もまた、より頻繁になったということである。第2章のなかでは、上海を考察地点とし、士人たちはどのように都市で社会的ネットワークを獲得し、そして維持してきたのかを分析している。この章の著者である瞿峻氏は、清末の上海で身を立てる知識人にとって、往来ネットワークが少なくとも「私誼ネットワーク（私的交際のネットワーク）、会社ネットワーク（同郷会、社団などのネットワーク）、集会ネットワーク（公開集会などのネットワーク）、伝播ネットワーク（新聞・雑誌などのネットワーク）」(p. 31) の四つがあると指摘している。

第3章は、五四運動が発生した1910年代における知識人の生活を考察している。ここで著者の宋宏氏は、政治的中心地である北京と社会的経済的中心地である上海という二つ異なる都市を比較しながら、それぞれの都市と知識人の関係を論じている。取り上げられた二つの都市における知識人集団は、北京の『新青年』と上海の『改造』に属している知識人である。二つの都市は、それぞれ独特な文化環境、政治的雰囲気などで知識人を吸収した。一方、知識人も自分の性格に合った場所を選ぶ。両者は相互に影響しあう。その結果として、『新青年』と『改造』のように、言論スタイルが異なるメディアが生まれた。

第4章は、五四運動以降の知識人の「内耗（内部分岐）」に注目している。考察したのは、北京、上海、広州に住む知識人である。とりわけ、『新青年』内部陣営の分裂、魯迅の数回の移動（職場の変遷）などを詳しく述べた上、著者の王曉漁氏が「1927年以前、知識人の間には分岐があったものの、外部の政治的高圧に対して共同の底辺線はあった。1930以降、彼らの内部分岐はすでにその一致してきた底辺線を越えてしまった」(p. 219) と結論づけた。

第5章、第6章の両章は、1930年代の知識人と地域社会の関係を論じている。第5章の著者である王儒年氏は中国左翼作家聯盟の参加者、「開明書店派」の成員を検討することによって、彼らの共通している特徴を発見した。それは、彼らの出身、家庭事情、教育

背景などが大いに似ていることである。「左聯」の参加者は、中国社会では中間階層に属し、師範学校卒業や海外留学などの経験をもっている。共通している国内での学歴と海外の留学経験は、彼らの慣習を強化し、「左聯」の基礎にもなっている。「開明書店派」の成員は、浙江省出身者が多い。成員の家庭は比較的貧困であるため、多くは中等教育しか受けていない。同じ上海以外の地域から来た「左聯」と「開明書店派」の知識人であるが、思想や行動における差異は明らかである。「左聯」メンバーの急進的な傾向に対して、「開明書店派」知識人は穏やかである。一方、第6章の著者の唐小兵氏は知識人の公共空間に注目している。その代表的な例は、林徽因が中心人物となる「太太的客厅（奥さんの応接間）」である。林徽因の「太太的客厅」は「物理的意味での建築空間だけでなく、社会学的意味においては互いに認可し、往来する空間であり、さらに文化権力<sup>5)</sup>と象徴資本を表象している文化空間でもある」(p. 319)として、ユルゲン・ハーバマスの言う近代欧州の文芸サロンに近い意味をもっている。このような知識人が集まる公共空間は、ほかにも朱光潜の「読詩会」、『大公報』文芸副刊の茶会などがある。

第7章では、1937年7月の盧溝橋事件以降、北京大学、清華大学、南開大学が昆明へ移転し成立した「西南聯合大学」を考察している。「聯大」の特殊性、そこに所属した知識人たちの生活の変化はどのようなものであったか、そして昆明という中国西南部都市において知識人の往来はどのような状況下で行ったのかの三つが、第7章の問いである。この章の著者である儲徳天氏は、「聯大」の知識人の生存・活動空間を社団、同人報（刊）、民主広場、茶館、文林堂、樹勛巷五号、金鷄巷サロンの7つに分けて、詳細な分析を行った。社団、同人報（刊）、サロンは「聯大」の知識人の往来過程において構築されてきた文化的産物である。一方、茶館、教会、広場という地理的空間も彼らにとって重要な「場」である。このような多様な公共空間の中で、「聯大」の知識人たちは「より広範囲にわたる公共往来を展開し、自身が属する文化ネットワークを確立し、個々の知識人共同体を構築した」(p. 368)という。

第8章は、1945年以降の知識人を検討している。ここでは、著者の鄭志峰氏は『観察』、『時与文』、「独立時論」、『新路』など日中戦争終結後現れたメディアとその関係者たちを考察対象としている。いずれの知識人集団の形成も、大学と密接且つ重要な関係がある。『観察』知識人集団とロンドン大学政治経済学院、『時与文』知識人集団と「西南聯大」、「独立時論」知識人集団と北京大学、『新路』知識人集団と清華大学。「都市公共ネットワークにおいて、出身学校は知識人が自己認識を実現し、相互に認可する第一層の空間関係である」(p. 475)、その「出身学校」は具体的な卒業校や、曖昧な留学経験（英国留学、米国留学など）をも含める。そして、鄭志峰氏は第二層の空間関係として「イデオロギー、つまり価値観、思想主張など」を挙げている。これによって、最終的な知識人集団が形成する。ここからは、

---

5) 脚注4)に参照。

国民党寄り、共産党寄り、そして中間路線の三者に関する議論へと移行している。最後に、鄭志峰氏は1945年以降の知識人の生活上の困難について言及し、「戦争のため知識人の力量を消耗し尽し、政治化によって彼らを再分化、対立させるにいたった」(p. 480)と指摘している。

#### IV 問題点と課題

冒頭で紹介したように、本書は『都市空間与知識群体研究書系』の一冊として刊行された。同シリーズは2008年4月時点で6冊に及ぶ。そのシリーズの刊行趣旨は都市空間論による近代中国知識人研究であるため、6冊における考察対象のすべては大都市（主に上海）である。本書の全体を見ても、上海を始め、北京・天津・広州などの大都市における知識人に力点が置かれていることが明白である。近代中国知識人の歴史を考える時、大都市における知識人（或いはその集団）に限定して検討することは無論有意義且つ有効な方法であると思う。しかし、中国という大きな地理空間と近代（本書では1895～1949としている）という長いスパンの枠組みを考察の前提として想起すれば、やはり大都市以外にも、地方都市と農村地域、そしてこれらの中に存在した歴史現象は無視することができないと考える。

さらにもう一つ疑問がある。すでに触れたように、本書の中では北洋政府、国民政府と軍閥の内戦によって、中央政府の民衆への支配は逆に弱体化し、社会各方面はむしろ発展したと論じている。しかし、一般的には戦争（内戦）が起こった時期において、国家の経済基盤及び国民の生活に大きなダメージを与え、致命的な損失が生じるはずである。本書の中で言及された「社会的自主発展」は一定の時期に上海などの大都市に限定して現れた現象であると思われるが、同時期の地方都市と農村地域は必ずしもそうは言えないではなかろう。むしろ、このように大都市と地方都市、さらに農村地域の三者における状況の違いは、知識人の流動及び大都市の「知識人社会」の形成に大きな要因となっていたのではないか。即ち、本書の中でも触れられているように、農村と都市の間における流動性によってもたらされた変化こそ、近代中国知識人の発展経過を論ずる際に本質的な問題であると思う。

本書のタイトル『近代中国知識分子的公共交往（1895－1949）』と全書の構成からみられるように、8人の著者は大きな「知識人歴史」構図を描き、多様な知識人個人と集団をこの構図の傘下に一望することが意識されている。故に、この構図の一部となる「大都市、地方都市、農村地域における知識人たちの関連性」に関する論点はより具体的に提示してほしい。これは、中国近代知識人に対する全体的、構造的考察における重要な課題だと考えるからである。

## V 結びにかえて——本書の意義と知識人研究における展望

以上のように本書に対して若干の疑問点を提起したが、本書の全体を見渡せば、中国近代知識人研究における創意に富んだ大作として評価したい。即ち、今まで個々人、或いは知識人集団における個別的な文化現象をそれぞれ単一に取り上げる先行研究と違い、本書は複数の人物・集団を立体交叉化させた複数の時空間に置き、それらの間における流動性や浸透性による変化に注目している点がユニークである。本書の中でも言及されたように、1980年代以降中国における知識人研究は、主に二つの角度から行われてきた。一つは知識人の伝統から現代への転換過程における思想文化の衝突という視点である。もう一つは知識人が社会身分（学術と政治における）の選択という視点である。21世紀以降、知識人研究において、多元的な研究手法は現れ始めている。その一つは、都市研究という視角からアプローチする手法である。このような研究手法は、特定の社会環境の中での知識人、そして彼らがどのように相互に影響し、どのように社会的公共空間と人的ネットワークを構築したかに注目している。本書はまさにその代表的な一つである。本書は、中国大陸における近代中国知識人研究の最新成果を反映したものとして、日本の中国研究者にとっても示唆を与えてくる研究書に違いない。同時に本書は、今後の知識人研究領域において、都市空間研究と結びつくという新しい方向性を示してくれたものである。

（上海人民出版社，2008年4月，543頁，RMB36元）

（ようとう・名古屋大学大学院博士課程）

### 【参考文献】

Timothy Cheek. (2006), Xu Jilin and the Thought Work of China's Public Intellectuals, *The China Quarterly* 186, pp.401-420.